

環境文学雑誌『緑葉』について

杉野元子

今年の1月中国で『緑葉』という新しい隔月刊の雑誌が誕生した。私はこの夏訪中した折に、第4期まで手に入れることができたので、この雑誌について簡単に論評したい。

この雑誌が創刊されるまでの経緯について、主編の楊矛は次のように書いている。1984年『中国環境報』が創刊された時、「緑地」という文学副刊が設けられた。そして中国環境報副刊部は1985年から「祖国環境美」、「勝利杯」、「緑色三明杯」などの名目で環境文学作品を募り、また環境文学の創作と発展の問題について8回の座談会を開いた。1991年2月には環境文学研究会が発足し、その席で王蒙が環境文学刊行物を創ることを提案し、その名前を「緑葉」とした。¹そしてその1年後の今年1月北京で環境文学雑誌『緑葉』が発刊されたのである。

創刊号の表紙は薄緑色の地に葉がデザインされており、2号以降は白地に葉がデザインされている。題字は夏衍の字で上部に大きく横に「緑葉」と書かれ、その上には活字で「生命は緑色を呼んでいる、人類は緑葉を愛している」とある。裏表紙には、毎号異なった風景画が印刷されている。毎号96頁で、小説、報告文学、散文、雑文、詩歌、評論、話劇、漫才、絵画、写真、漫画などの頁が設けられている。値段は1冊2・2元である。

ところで発刊の詞のなかでも述べられているように、『緑葉』は環境文学作品を掲載する雑誌なのだが、環境文学とはいったい何なのであろうか。李炳銀は「文学と環境瑣議」のなかで、「およそ人々の大自然に対する愛と、環境の悪化への憂慮を喚起する文学はすべて『環境文学』として受け入れられる。」と書いている。²中国における「人々の大自然に対する愛」を喚起する文学としてまず思い浮かぶのは、古典詩の中の山水を詠ったものであろう。目加田誠は「中国に於て、山水を詠ずることは、魏晋の時代から始まった。これはやはり当時、老荘思想が浸透し、人々が山林の間に退き、権謀術数きわまりない社会からのがれて身を守り、悠久な境地に心を養い、わが生を楽しもうとする気風が著しくなってきたためである。・・・この点西洋に

於ては、その始まりが非常におそい。ヨーロッパ人が、自然美を愛して詩を作るようになったのは、恐らく十八世紀末浪漫派以後のことではあるまいか。」と書いている。³ この目加田氏の説によれば、中国ではヨーロッパよりずっと早く「人々の大自然に対する愛」を喚起する文学が書かれるようになった。

しかし中国において「環境の悪化への憂慮を喚起する文学」が書かれるようになったのは、ヨーロッパよりずっと遅い文革終了後のこの十年ほどのことである。「環境の悪化への憂慮を喚起する文学」を執筆する動機となる環境の悪化を憂慮する意識は、放牧による森林破壊、産業革命による自然破壊を経験し、なおかつ都市化の洗礼を早く受けたヨーロッパにおいて最初に目覚めた。水野憲一は、「情報化される自然」のなかで、近代の産業化社会の発達に伴う自然破壊に対する対応として生まれてきた自然保護の考え方が欧米で広く理解されるようになったのは1960年代であり、マスメディアが大きな働きをし、たとえば環境問題について多くの報道がなされただけでなく、自然史をショーアップしたテレビ番組が次々と制作され、強い影響力をもった、と書いている。⁴

日本でも60年代には四大公害裁判（水俣病、新潟第二水俣病、イタイイタイ病、四日市大気汚染）が起きた。新聞・テレビは大々的にこの問題を取り上げ、我々日本人が公害というものを身近で深刻な問題として考えるきっかけとなった。またアメリカでは62年に農薬汚染の危険性を訴えたレイチェル・カーソンの『沈黙の春』が出版され、日本では69年水俣病の問題を取り上げた石牟礼道子の『苦海浄土—わが水俣病—』が出版され、それぞれ大きな反響を呼んだ。

このように欧米や日本では、環境問題は1960年代に最初の高潮を迎えたのだが、この頃中国ではどのような状況だったのだろうか。曲格平は『中国を救え—環境が出している黄色いカードの警告』の序文で次のように書いている。

第一次高潮の時期わが国は環境問題に対して、認識を欠いていた。特に硬化した思想の影響のもとで、環境問題は資本主義特有の産物であり、社会主義には環境汚染問題は存在しないと考えていた。対岸の火事を見ているかのように、自己陶醉し、その結果時機を失い、積み重なり後戻りできない環境汚染の局面を生み出し、悲痛な教訓を残した。⁵

このような状況のもとでは、文学は新中国の社会をバラ色のものとして描くものや、人と人との間の階級闘争をテーマとするものが主流となった。文革終了後、文革を批判・反省し、社会主義社会の暗部を冷静に見つめなおそうとする動きのなかで、社会主義中国のなかでもやはりおきていた環境の悪化の問題をとりあげた文学作品が書かれるようになった。張靑は「緑色の庭園の失落と再建——環境文学随想」のなかで、次のように書いている。

新時期文学の園地は人材が輩出した肥沃な土壤である。しかしホイットマンやディケンズのように生態環境について激しい言葉をはく人々がほとんど見られない時期があった。80年代初期『樹王』、『大林莽』、『不可思議な大地』などの作品が出現したものの、それは極左政治思想を批判することを主題とした際に、生態環境の問題についても触れたにすぎず、環境意識は当時の文学のなかではまだ蒙昧状態にあった。⁶

さらに張は、80年代中後期を環境文学の始動期、90年代初めを突進期としたうえで、次のように書いている。

始動期の環境文学の特徴は、作家が報告、紀実文学形式をしばしば運用し、多くの情報量で、人をして震え驚かせる環境危機問題を報道したことにある。・・・90年代初めに入り、環境文学は報告、紀実から小説、詩歌、散文（雑文、随筆を含む）などの多くの芸術形式へと突入した。⁷

新時期文学において、環境問題がどう扱われてきたかというこの張の分析に私は大体同意するのだが、ただ阿城の『樹王』は、80年代初期の作品ではなく、発表されたのは85年であり、⁸ またこの作品は、文革時の極左政治思想を批判しているだけでなく、人と自然との関係のありかたを問いなおそうとした小説であり、環境問題を扱った小説の始動期に位置するものとしてもっと重要視されるべきだと考える。

『樹王』には、山の木をすべて伐り倒し、経済的価値の高い木を植樹しようとする下放青年たちと、それに反対する蕭という一人の村民との葛藤が描かれているのだが、そのなかに次のような場面がある。下放青年の一人李立が、村人から神木と信じられている老木を伐る行動にでたとき、蕭は自らの命にかえてもその老木を守ろうとする。そして蕭は、この木は広い面積を占

抛している役たらずの木だという李立に対して、「いや、役に立つ。おれは学がないから、どんな役に立つかは言えない。だけど、これがここまで大きくなるのは、容易なことじゃない。これがもし子供だったら、これを育てた者は伐ることなんかできやしない」と反論する。結局李立の「人は必ず天に勝つ。田畑は、神様が開いてくれたんですか。いいや、人が自分を養うために開いたんです。鉄は神様が精練してくれたんですか。いいや、人が精練し、道具を作り、自然やそれからあなたのいう神様とやらも改造するんです。」⁹という言葉に押し切られ、老木は伐り倒される。

この村民蕭は自分自身を自然界において決して突出した存在ではなく、他の動植物と対等なひとつの存在にすぎないと考え、そのことによって、内なる自然つまり自分自身の生命の営みを外なる自然と無理なくつながらせ、自由に交感し合っていた。彼は、日常生活の営みのなかで、人間と自然の間の共生のバランスのイメージ（生態系のイメージ）を実感していたのである。文革中、彼のこのような考え方は、人間が自由にその意志のおもむくままに自然に働きかけ自然を改造することを是とし、人間はそのことによって人間としての主体性を獲得し自由を獲得すると考える近代思想を信仰していた人々に無視され、顧みられなかったのだが、このことへの疑問を呈しているのが『樹王』なのである。

さて張は90年代初めを環境文学の突進期としたが、その主力を担うことを期待されているのが、今年創刊された『緑葉』であろう。前述したように『緑葉』にはいろいろなジャンルの作品が掲載されているが、中心となっているのは、小説と報告文学である。創刊号から第4号までに小説は計18篇、報告文学は計15篇掲載されている。内容をみると、樹木の保存や植樹造林の問題を取りあげたものが一番多く、計5篇（葉楠『大溝』、趙大年『玉胡蝶』、李青松『北京古樹群』、王月礼『樹傷』、姜凜『林業局長の一日』）あり、次に多いのが工場排水による川や湖の汚染の問題を取りあげたもので、計4篇（李国文『海の詩』、張揚『ニュースは発表すべからず』、曉華『鹿溪河からの緊急報告』、趙大年『濠河のさざなみ』）あり、その他に開発か自然保護かという問題をテーマとしたものが2篇（劉心武『青箬溪の恋』、蔣子龍『水中の黄昏』）ある。有名作家、人気作家も執筆陣に名を列ねているが、住民が汚染された有害な魚を食べているのに、そのことを公表しようとしないう行政機関、マスコミのことなかれ主義を諷刺をきかせた軽妙な筆致

ですとく批判している張揚の小説『ニュースは発表すべからず』を除き、興味を引くものが少なかった。たとえば余華の『自殺未遂者の後述』。失恋した若者が自殺しようとし、ビルからの飛び降り自殺を考えつくのだが、そのビルの下の路上にゴミの山があるのを見て、ここでは死にたくないと思う。次に鉄道自殺を考えつくが、線路の横に弁当などのゴミが散乱しているのを見て死に場所をほかに探すことにする。最後に崖から海への飛び込み自殺を思いつくが、海水は付近の工場からの汚水で真っ黒、結局死に場所が見つからず、死ぬのをあきらめる、といった内容だが、まさに環境問題というテーマにあわせて無理に作りあげた駄作とっていいだろう。

この夏北京で何人かの中国現代文学研究者に聞いてみたところ、『緑葉』の創刊について知っている人はかなりいたが、実際に『緑葉』を読んだ人は一人もいなかった。文学研究者でさえ、このように関心が低いのであるから、おそらく一般の人は『緑葉』という雑誌の存在さえもほとんど知らないであろう。我々自身の過去を振り返ってみるとわかるように、日本人は60年代各地に発生した公害という工業文明の苦い果実を味わったものの、それにこりることなく科学技術の限りない発達による問題全面解決を信じ、進歩への信仰を捨てず、生産至上主義にもとづく高度経済成長路線を邁進し続けた。そして押しも押されぬ経済大国となった最近になってやっと、日本人は身の回りから自然が消失していることに危機感を覚え、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨、熱帯雨林の減少、砂漠化といった地球規模の問題にも関心を向け、生態系の全体のなかにおける共生と循環の重要性を認識するようになった。したがって中国人も、日本人がそうであったように、自然を犠牲として経済発展を遂げ、生活にある程度の余裕ができたとき、やっと自然との共生の必要性に目覚めるのかもしれない。しかし『中国を救え——環境が出している黄色いカードの警告』を読むとわかるように、中国は、経済においては発展途上にあるが、環境破壊においてはすでに先進国となっており、環境のこれ以上の悪化を食い止めながら経済発展をするという困難な道を選ばざるおえない状況にある。

今秋開催された中国共産党第14回党大会で、計画経済から社会主義市場経済へと方向転換することが決定された。今後中国では市場が堂々と日の当たるところへでてくるようになるであろうが、このような時にこそ、市場の陰にかくれがちになる自然の存在に光をあて、市場中心の支配的文化を告発し、生態系の原理にもとづいた社会のあり方を模索する働きを担う文学作品の出

現が期待されるし、そのような作品を掲載する場を提供する『緑葉』の存在意義も大きくなるを考える。また『緑葉』の名誉主編は作家の王蒙と国家環境保護局局長曲格平となっているが、国の環境政策を讀えるばかりの御用雑誌にならないことを期待する。たとえば、9月26日付の朝日新聞夕刊は、25日閉幕した第2回核被害者世界大会に、中国の核実験場がある新疆ウイグル自治区の元住民（現在は旧ソ連・カザフスタン共和国に居住）が参加し、核実験により、周辺に気象異変が起きていることを訴えたと報道しているが、このような問題を取り上げ、国の政策に異を唱える作品が書かれた時、『緑葉』がそれを掲載する勇気を持ち、草の根民主主義の芽を育むことができるといいのだが・・・。

なにはともあれ、20世紀は資本主義か社会主義かというイデオロギー対立の世紀であったが、まもなくやってくる21世紀はエコロジーの問題が全世界を覆う最重要課題となるだろう。『緑葉』は芽生えたばかりの若葉であり、未熟な作品が多いが、長く続けていく価値のある雑誌だと思う。

(注)

- 1 楊矛「讓大地充滿綠——從『綠地』到『綠葉』」（『緑葉』第1期 1992・1 p5）
- 2 李炳銀「文学与環境瑣議」（『緑葉』第2期 1992・3 p94）
- 3 目加田誠「中国文芸思想における『自然』ということ」（『洛神の賦』1989・8 講談社 p78。もと『日本中国学会報』第18集 1966・10）
- 4 水野憲一「情報化される自然」（黒坂三和子編『自然への共鳴』第2巻 1989・9 思索社 p97～99）
- 5 曲格平「序」（韓国剛編『救救中国——環境発出的黄牌警告』1989・12 求实出版社・瀋陽出版社 p1）
- 6 張韜「綠色家園的失落与重建——環境文学随想」（『緑葉』第4期 1992・7 p39）
- 7 6に同じ p39～40
- 8 孔捷生の『大林莽』も、80年代初期ではなく、84年に発表された作品である。
- 9 阿城「樹王」（『棋王・樹王・孩子王』1989・12 海風出版社 p149。もと『中国作家』第1期 1985・1）